

令和元年6月21日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16H03346

研究課題名(和文) 北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研究

研究課題名(英文) Phenomenological Research on vulnerability and limitation of human being based on collaboration with Nordic phenomenologists

研究代表者

浜渦 辰二 (Hamauzu, Shinji)

大阪大学・文学研究科・招へい教員

研究者番号：70218527

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、北欧現象学者との共同研究に基づき、人間の傷つきやすさと有限性に着目して、誕生、老い、病い、死、障がい、痛み、性とジェンダーといった具体的な問題を現象学的に考察することを目指した。毎年、北欧の現象学者と共同研究を行い、北欧現象学会に2-3人の発表者を派遣し、2018年北京での世界哲学会でも二つのラウンドテーブルで研究発表・学術交流を行った。また、国内の研究会も通算10回の開催となり、それぞれの研究成果についてお互いに意見交換をすることができ、それをもとに研究成果報告書(非公開)を作成し、それにより近い将来に研究成果をまとめた書物を刊行するための交渉を出版社と始めることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、医学モデルでも社会モデルでもこぼれ落ちてしまう人間の傷つきやすさと有限性の現象を当事者の視点から現象学的に考察することで、医学や社会学では見逃されていた事象を明らかにするという学術的な意義をもっている。それはひいては、超高齢社会、少子化、男女共同参画といった現代社会の諸問題を当事者視点から解明することで、社会的な解決のための議論に貢献することが期待できる。

研究成果の概要(英文)：This project based on collaboration with Nordic phenomenologists was intended to focus on the vulnerability and the limitations of human beings and phenomenologically investigate concrete problems such as birth, aging, illness, death, disability, pain, sex and gender. Every year we had collaborative meetings with Nordic phenomenologists, sent two or three members to the annual conference of the Nordic Society for Phenomenology and organized two round tables at the World Congress of Philosophy in Beijing 2018. Also we organized domestic meetings totally ten times, made mutual exchange of opinions on each result of research and edited a report (unpublished), so that we could began a negotiation with a publisher about a possibility to publish a book in the near future.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：北欧現象学 傷つきやすさ 生老病死 性とジェンダー 障がい

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

応募者は、フッサールの間主観性の現象学の研究を一貫して継続しながら、その延長線上で海外の現象学者たちと学術的交流を続けて来た。その一方で、間主観性の具体的なあり方を解き明かす一つの道としてケアをめぐる問題に取り組み、ケアの現象学の共同研究においては看護や介護の研究者と、臨床哲学の共同研究においては精神科医との対話に取り組み、さらに地域でのケア文化の育成にも取り組んで来た。

そうした研究の経緯のなか、現象学とケアの問題への関心を共有するスウェーデンの現象学者 (Karin Dahlberg 教授、当時リネウス大学)に出会い、北欧ケア(北欧諸国に特徴的なケア観をこう呼んだ)の哲学的背景を探究すべく、死生学・看護学・リハビリ学・福祉学・文化人類学といった多分野の研究者との学際的な共同研究「北欧ケアの実地調査に基づく理論的基礎と哲学的背景の研究」(平成 22~24 年度、基盤研究(B))および「北欧の在宅・地域ケアに繋がる生活世界アプローチの思想的基盤の解明」(平成 25~27 年度、基盤研究(B))に取り組んできた。その過程でさらに、性的差異(男性・女性)の問題を問い直すフェミニスト現象学から出発しながら誕生・老い・死といった問題に関心を寄せてきているスウェーデンの研究者(Lisa Forkmarsson Käll 准教授、当時リンショーピン大学)やフィンランドの研究者(Sara Heinämaa 教授、ヘルシンキ大学・ユヴェスキュラ大学兼任)とも出会うことになり、彼らの関心動向の背景には、北欧諸国が福祉とケアの先進国としてケアの問題への関心が高く、また働く女性への支援が充実しているため女性研究者が多いということがあると感じるようになった。こうして、私が現象学とケアへの関心から出発して取り組んで来たことと彼らが性的差異の現象学から出発して取り組んで来たことが、それぞれパーソンセンタード・ケアや当事者研究という考えとも繋がりがながら、人間の傷つきやすさ(病い、老い、障がい)と有限性(誕生と死によって限られてあること)の現象学的研究へと合流するのではないかと考えた。

こうした関心の出会いのなかで北欧現象学者たちと交流が深まり、2014 年 3 月には、上記の Käll 准教授を招いて研究会「北欧のフェミニスト現象学とケア」を開催し、同年 10 月には、同准教授の招きにより、応募者が国際会議「認知症とともに生きる:関係」(リンショーピン大学)に参加し発表「対人関係の病いとしての認知症」を行った。また、2015 年 3 月には上記 Heinämaa 教授を大阪大学に招聘し、公開講演会「老いと死:現象学的哲学的アプローチ」および公開セミナー「フェミニスト現象学」を開催し、同年 5 月には若手研究者(イリーナ・ポルシェチック博士、ヘルシンキ大学)を招聘し、公開セミナー「フェミニスト現象学に関する研究」を開催した。また、同年 9 月には、応募者がヘルシンキ大学に招かれ、Heinämaa 教授がオーガナイズした学際的ワークショップ「対話と間主観性」にて基調講演「フッサール現象学と精神医学における対話」を行い、さらには上記ダールベリ教授の紹介により、「パーソンセンタードケア・センター」(ヨーテボリ大学、スウェーデン)で講演「パーソンセンタード・ケアの間主観性」を行った。こうした経緯から、「北欧現象学者との共同研究に基づく人間の傷つきやすさと有限性の現象学的研究」という本研究の構想を抱くに至った。

2. 研究の目的

日本の現象学者と北欧現象学者の交流が始まって 8 年が経ち、これまで先行してきた独・仏・米といった国々の現象学者とは少し異なる研究の交流が行われて来ている。その違いは、北欧諸国が福祉とケアの先進国であること、その事と連動して女性の研究者が多いこと、こうしたことが背景にあるように思われる。その特徴を人間の傷つきやすさと有限性に着目した現象学の動向として捉え、誕生、老い、病い、死、障がい、痛み、性といった問題の広がりを現象学的に考察する共同研究を行うことが、本研究の課題である。本研究は、当事者の視点から考察を始めることで、社会の側からの視点ではこぼれ落ちてしまう現象を解明し、ひいては、超高齢社会、少子化、男女共同参画といった現代社会の諸問題の解明にも貢献することが期待される。

3. 研究の方法

本研究は、北欧の現象学者たちとの共同研究に基づいて、日本側の現象学者たちがそれぞれの関心から「人間の傷つきやすさと有限性」という共通テーマについて共同研究するものである。そのため、(1)それぞれの関心がこの共通テーマに繋がっていくことを少しずつ確認しながら、(2)国内での研究会により共同研究を推進し、(3)日本側メンバーが北欧の学会・研究会に参加・発表して、北欧での共同研究を行なうとともに、(4)北欧の現象学者を招聘して、国内で国際シンポジウムを開催して学術的交流を深め、(5)それぞれの研究成果をインターネットおよび紙媒体で公開し、(6)近い将来に研究成果をまとめた書物を刊行することを目指す。

4. 研究成果

本科では、「誕生、老い、病い、死、障がい、痛み、性」という問題の場が「人間の傷つきやすさと有限性」という共通テーマに繋がってくることを少しずつ確認するために、各年度に「誕生」「老い」「死」という三つの媒介的テーマを配置して、それらを各年度の核にすえながら共同研究を進めることを計画した。

平成 28 年度は、「誕生」を共同研究の核に据えて、それにまつわる性・生理・性行為・生殖・受精・避妊・不妊・妊娠・中絶・出産・障がい・少子化といった諸問題に焦点を当てた。共同

研究を始めるにあたって、それぞれのこれまでの研究成果を共有するとともに、これまでのそれぞれの関心がやがては共通テーマへと繋がっていくことを少しずつ確認しながら、北欧現象学者たちとの学術的交流を開始した。国内での研究会は、第1回研究会を大阪大学(2016/7/18)、第2回研究会を明治大学(2016/12/23)、第3回研究会を神戸大学(2017.2.20)にて行い、とりわけ第3回研究会は、国際シンポジウムも兼ねて、他科研(代表:研究分担者の稲原)の招へいによりスウェーデン・ヨーテボリより来日していた Emma Gran 講師に参加いただき開催した。また、研究分担者を北欧諸国に派遣して、そこで研究会を開催することを模索したが、当てにしていたスウェーデンの研究者とフィンランドの研究者が、それぞれ出産休暇に入ったことと、学内の改組のため余裕がなくなったこととで、ともに不可能になったため、相談の結果、翌年度5月に開催される北欧現象学会で一緒にワークショップを開催することとなった。

平成29年度は、「老い」を共同研究の核に据えて、それにまつわる身体的変容・老いと誕生・老いと性・老いと病い・老いと障がい・老いと痛み・老いと死といった諸問題に焦点を当てること、また、それぞれが取り組んで来た問題に相互乗り入れをすることで共同研究を深め、本研究の共通テーマのワークショップを開催することも計画した。前年度からの繰り越しとなった研究分担者の北欧諸国への派遣により、ストックホルム大学でセミナー“Feminist Phenomenology: Perspectives from Japan”(2017/6/12)を開催し、中澤と中がを発表を行い、ストックホルムの研究者と意見交換をし、また、トロンハイムのノルウェー科学技術大学での北欧現象学会(2017/6/15-17)にて、浜渦が Plenary session “On Dis/Ability in Husserl's Phenomenology”を、稲原、小手川の2人が、Irina Poleshchuk(Finland, Helsinki University)と Lisa Folkmarson Käll(Sweden, Stockholm University)とともに Parallel session “Nordic-Japanese Panel: The Phenomenology of Vulnerability - Birth and Aging”を行った。また、国内での研究会として、第4回研究会を日本大学(2017/5/27)にて、第5回研究会を神戸大学(2017/9/30)にて、第6回研究会を大阪大学(2018/1/29)にて行い、特に第6回研究会は、東アジア哲学会議「現象学・臨床哲学・倫理学を繋ぐ」も兼ねて、中国語圏の研究者を7人(広州から2人、香港から1人、台北から4人)招いて開催した。

平成30年度は、「老いと死」を共同研究の核に据えて、それにまつわるこれまで取り組んで北諸問題との繋がりを考慮しながら、各研究分担者と北欧の共同研究者とが共同研究の成果をまとめることに取り組んだ。ポーランドのグダニスク大学での北欧現象学会(2018/4/19-21)にて、池田が“Phenomenological Perspectives on Implicit Bias”、小手川が“Phenomenology of Masculinities: Can the Phenomenology of Masculinities Contribute to Feminism?”、筒井が“Medicalization of Transgender and Possibilities of Gender Self-determination: The Japanese Situation”という口頭発表を行い、北欧現象学者たちと充実した討論の時間を持つことが出来た。第7回研究会を國學院大學(2018/5/3)に行い、それを踏まえて、北京大学で行われた第24回世界哲学会議(2018/8/13-20)では、“The Phenomenology of Vulnerability: Birth, Aging, and Death”(Irina Poleshchuk, Xin Mao, Minae Inahara, Erika Ruonakoski, Shinji Hamauzu)、および“Trans-Cultural Phenomenology of Race”(Alia al-Saji, Eric Chelstrom, Tetsuya Kono, Shojiro Kotegawa, Helen Ngo)という二つのラウンドテーブルを開催し世界各国の参加者と意見交換をすることができた。第8回研究会を立教大学(2018/8/25)で Alia al-Saji と Helen Ngo を招いたシンポジウムと共催で行った。それらの機会を通じて、北欧諸国のみならず、東欧、中国、米国、豪州にも関心を共有する研究者がいることが分かり、その後、ベラルーシ、リトアニア、ロシアでも研究発表・学術交流を機会を作ることができた。第9回研究会を大阪大学(2018/11/10)にて、第10回研究会を東京大学(2019/3/21)にて行い、特に第10回研究会では、川崎、小手川、石原、池田が、それぞれの研究成果を発表するとともに、研究組織全員の3年間の共同研究の成果となる論文集『傷つきやすさと有限性の現象学的研究』を編集・発行した(ただし、出版社と刊行を交渉中なので、まだ未公開)。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計17件)

- (1) INAHARA, Minae, “The Ghost of Eugenics in Japan: Exploring the Intersections of Disability, Asexuality, and Anonymity”, Association for Asian Studies 2019 Annual Conference, 2019, 査読無
- (2) 中 真生, 「「母であること」(motherhood)を再考する 産むことからの分離と「母」の拡大」, 思想, 2019, pp.140-159, 査読無
- (3) IKEDA, Takashi, “Security, Peace, and Freedom: Beauvoir and Heidegger on Aging and Death”, *Meiji Journal of Philosophy*, 2019, pp.33-46, 査読無
- (4) 浜渦辰二, 「北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす:活動報告」, 池田喬・合田正人・志野好伸共編『異境の現象学 現象学の異境的展開 の軌跡 2015-2015』, 2018, pp.231-267, 査読無
- (5) 稲原美苗, 「当事者とともに:現象学的質的研究の可能性を考える」, 現象学と社会科学, 第1号, 2018, pp.31-48, 査読有
- (6) INAHARA, Minae, “Rethinking Feminist Standpoint Theory: The Situated Knowledge of the Disabled and Tojisha- Kenkyu”, Internatinal Christian University Peace

Research Institute Monograph Series #1: Disabilities in Context Toward an Empowering Vision, 2018, pp.23-28, 査読無

- (7) INAHARA, Minae, "Disability and ambiguities: technological support in a disaster context", *Routledge Handbook of Well-Being* (Kathleen T. Galvin ed.), 2018, pp.124-132, 査読無
- (8) 小手川正二郎, 「「男らしさ」(masculinities)の現象学試論 「男らしさ」の現象学はフェミニズムに寄与しうるのか?」, 國學院雑誌, 2018, pp.1-14, 査読無
- (9) NAKA, Mao, " 'Baby-Hatches' in Japan and Abroad: An Alternative to Harming Babies", The European Conference on Ethics, Religion & Philosophy 2018: Official Conference Proceedings, 2018, --, 査読有
- (10) 中 真生, 「「産む性」をめぐって 生殖と「母性」再考」, フランス哲学思想, 2018, pp.11-24, 査読無
- (11) 川崎唯史, 「メルロ=ポンティにおける道徳論の試み」, 倫理学研究, 2018, pp.101-112, 査読有
- (12) 川崎唯史, 「知覚の本性から主体の本性へ 前期メルロ=ポンティのプログラム」, メタフユシカ(49), 2018, pp.85-98, 査読無
- (13) HAMAUZU, Shinji, "On Dis/Ability in Husserl's Phenomenology", 臨床哲学, 2017, pp.79-94, 査読有
- (14) 石原孝二, 「認知症と精神障害: 精神病理学と生物・心理・社会モデルの哲学」, 臨床心理学, 2017, pp.294-297, 査読無
- (15) 稲原美苗, 「障害とスティグマ 嫌悪感から人間愛へ」, 思想, 2017, pp.42-54, 査読無
- (16) 中澤 瞳, 「メルロ=ポンティと身体図式」, 研究紀要(日本大学通信教育部), 2016, 107-121, 査読無
- (17) NAKA, Mao, "The Vulnerability of Reproduction: Focusing on Pregnancy and Breastfeeding", 神戸大学文学部哲学懇話会紀要『愛知』, 2016, pp.3-14, 査読無

〔学会発表〕(計 32 件)

- (1) 川崎唯史, 「傷つきやすさと実効的自由 メルロ=ポンティ的アプローチ」, 第 10 回科学研究会「傷つきやすさと有限性の現象学」, 2019.
- (2) TSUTUSUI, Haruka, "Localization of 'GID' notion in Japan: Biological essentialism and possibilities of gender self-determination", シンポジウム「トランスジェンダーの哲学 & 共同行為論」(主催:新学術領域科研「トランスカルチャー状況下における顔身体学の構築 多文化をつなぐ顔と身体表現」), 2019.
- (3) 筒井晴香, 「トランスジェンダーと子宮移植をめぐる倫理的問題」, GID(性同一性障害)学会第 21 回研究大会・総会, 2019.
- (4) 筒井晴香, 「性と「ほんとうの私」 ナラティブとしての生物学的本質主義」, IGS セミナー(主催:お茶の水女子大学ジェンダー研究所), 2018.
- (5) NAKA, Mao, "Alternatives to terminating the life of a baby or a fetus: From 'Baby Post' to Pregnancy conflict counseling", International Symposium and Workshop by Interfaculty Initiative in Advance Researches at Kobe University, 2018.
- (6) 小手川正二郎, 「「男らしさ」(masculinities)の現象学試論 「男らしさ」の現象学はフェミニズムに寄与しうるのか?」, フェミニズム研究会(立命館大学), 2018.
- (7) HAMAUZU, Shinji, "The Phenomenology of Ageing", XXIV World Congress of Philosophy, Beijing 2018.
- (8) HAMAUZU, Shinji, "The Anthropology of Ageing", Centre for Philosophical Anthropology in Minsk (Belarusi), 2018.
- (9) HAMAUZU, Shinji, "Two Ways of Clinical Philosophy in Japan", European Humanities University in Vilnius (Lithuania), 2018.
- (10) 池田喬, 提題「差別的偏見: 現象学的アプローチ」, 日本倫理学会第 69 回大会, 主題別討議「現象学的倫理学の最前線」, 2018.
- (11) IKEDA, Takashi, "Phenomenological Perspective on Implicit Bias", The 16th annual Conference of the Nordic Society of Phenomenology, 2018.
- (12) INAHARA, Minae, "Expressing Pain through Fine Art: The Power of Dialogue", XXIV World Congress of Philosophy, Beijing 2018.
- (13) 稲原美苗, 「哲学的当事者研究の可能性 造形制作を通じたピアとの対話の意義について」, 日本哲学プラクティス学会 第 1 回大会, 2018.
- (14) INAHARA, Minae, "Visualizing Pain with an Artist: A Phenomenological Study of Embodied Subjectivity in Dialogue", 8th PEACE (Phenomenology for East Asian Circle) Conference, 2018.
- (15) KOTEGAWA, Shojiro, "Phenomenology of 'Yellow Race' ", XXIV World Congress of Philosophy, Beijing 2018.
- (16) 小手川正二郎, 「親子関係の現象学的倫理学 親子と血縁をめぐって」, 日本倫理学会主題別討議, 2018.

- (17)中澤 瞳, 「家族の中の老い」, 日本現象学会第 40 回研究大会、男女共同・若手研究者支援ワークショップ「家族におけるケアと依存」, 2018.
- (18)NAKA, Mao, “Reinterpretation of Motherhood: Separating it from Giving Birth”, Oxford Uehiro Centre Work in Progress Seminar, Oxford Martin School, 2018.
- (19)NAKA, Mao, “ ‘Baby-Hatches’ in Japan and Abroad: An Alternative to Harming Babies”, European Conference on Ethics, Religion & Philosophy, 2018.
- (20)KAWASAKI, Tadashi, “Vulnerability and Effective Freedom: A Merleau-Pontian View”, Phenomenology in Cross-Cultural Perspective: From Affection to Ethics, 2018.
- (21)川崎唯史, 「支配者を降りてケアをする 男性の子育てについて」, 日本現象学会第 40 回研究大会, 2018.
- (22)TSUTUSUI, Haruka, “Medicalization of transgender and possibilities of gender self-determination: The Japanese situation”, 16th Annual Conference of the Nordic Society for Phenomenology, 2018.
- (23)ISHIHARA, Kohji, “On phenomenological investigation of neuro-developmental /cognitive disorders”, Phenomenology Research Seminar, University of Helsinki, 2018.
- (24)NAKAZAWA, Hitomi, “Body schema and theory of feminist phenomenology”, Seminariet i feministisk kontinentalfilosofi i Stockholm, Stockholm University, 2017.
- (25)NAKAZAWA, Hitomi, “Body schema and Merleau-Ponty”, International Society for Theoretical Psychology, 2017.
- (26)INAHARA, Minae, “Philosophy Cafe; Dialogues as the Phenomenological Foundation for a Feminist Exploration of the Lived World of Mothers Who Have Raised Children with Disabilities”, Nordic Society for Phenomenology 15th Annual Conference PHENOMENOLOGY AND THE BODY CONTEMPORARY PERSPECTIVES, 2017.
- (27)NAKA, Mao, “Some Glimpses at Japanese Feminist Philosophy: In terms of Reproduction and Motherhood”, Workshop within the framework of the Seminar in Feminist Continental Philosophy in Stockholm (collaboration between Gender Studies at Stockholm University and Philosophy at Södertörn University), 2017.
- (28)中 真生, 「「産む性」をめぐって 生殖と「母性」再考」, 日仏哲学会大会シンポジウム, 2017.
- (29)KOTEGAWA, Shojiro, “To Have a Child and To Become a Parent”, Nordic Society for Phenomenology, at Norwegian University of Science and Technology, 2017.
- (30)NAKA, Mao, “Reproduction and Vulnerability: Pregnancy and Breastfeeding”, Reproduction and Vulnerability: Pregnancy and Breastfeeding, 2016.
- (31)KOTEGAWA, Shojiro, “Rethinking Gendered Corporeality from the Perspective of Feminist Phenomenology”, The 3rd Conference on Contemporary Philosophy in East Asia (CCPEA), Seoul National University, Seoul, South Korea, 2016.

〔図書〕(計 8 件)

- (1) 浜渦辰二, 『ケアの臨床哲学への道 生老病死とともに生きる』晃洋書房, 2019, pp.568.
- (2) 浜渦辰二 (編著), 『傷つきやすさと有限性の現象学的研究』研究成果報告書 (未公開), 2019, pp.111.
- (3) HAMAUZU, Shinji, *On Development from Husserl's Phenomenology - Between Phenomenology of Intersubjectivity and Clinical Philosophy of Caring -*, Memoirs of the Graduate School of Letters, Osaka University, 2018, pp.310.
- (4) 浜渦辰二, 『可能性としてのフッサール現象学 他者とともに生きるために』, 晃洋書房, 2018, pp.487.
- (5) 浜渦辰二 (編著), 『北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす』, 大阪大学出版会, 2018, pp.296.
- (6) 筒井晴香 (共著者), 信原幸弘 (編) 『ワードマップ 心の哲学 新時代の心の科学をめぐる哲学の問い』, 新曜社, 2017, pp.320.
- (7) IKEDA, Takashi (共著者), *Orte des Denkens / Places of Thinking (Welten der Philosophie)*, Verlag Karl Alber, 2016, pp.408.
- (8) NAKA, Mao (ed. Jonna Bornemark & Nicholas Smith), *Phenomenology of Pregnancy*, Soedertoern University Press, 2016, pp.297.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0 件)

取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

1) 研究分担者氏名：中 真生

ローマ字氏名：NAKA, Mao

所属研究機関名：神戸大学

部局名：文学研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：00401159

2) 研究分担者氏名：稲原 美苗

ローマ字氏名：INAHARA, Minae

所属研究機関名：神戸大学

部局名：人間発達環境学研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：00645997

3) 研究分担者氏名：石原 孝二

ローマ字氏名：ISHIHARA, Koji

所属研究機関名：東京大学

部局名：大学院総合文化研究科

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30291991

4) 研究分担者氏名：小手川 正二郎

ローマ字氏名：KOTEGAWA, Shojiro

所属研究機関名：國學院大學

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30728142

5) 研究分担者氏名：中澤 瞳

ローマ字氏名：NAKAZAWA, Hitomi

所属研究機関名：日本大学

部局名：通信教育部

職名：准教授

研究者番号（8桁）：30756010

6) 研究分担者氏名：池田 喬

ローマ字氏名：IKEDA, Takashi

所属研究機関名：准教授

部局名：明治大学

職名：文学部

研究者番号（8桁）：70588839

7) 研究分担者氏名：筒井 晴香

ローマ字氏名：TSUTSUI, Haruka

所属研究機関名：玉川大学

部局名：教育学部

職名：非常勤講師

研究者番号（8桁）：90760489

8) 研究協力者氏名：川崎 唯史

ローマ字氏名：KAWASAKI, Tadashi

所属研究機関名：国立研究開発法人国立循環器病研究センター

部局名：研究開発基盤センター

職名：流動研究員

研究者番号（8桁）：90814731

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。